

教職キャリア意識に及ぼす教育実習の影響

今野 紀子*

Effects of Teaching Practice on Teaching Career Awareness

KONNO Noriko*

キーワード：教職キャリア，教育実習，教職入門，教師不足，令和の日本型学校教育

1. はじめに

「教師不足」の状況が続いている。2021年度に文部科学省が都道府県・政令指定都市等全国68の教育委員会を対象に行った調査では、公立学校において臨時的任用教員等の確保ができず、始業時点で2,558人の欠員が生じていた¹⁾。2023年度当初の状況について同様にを行った調査では、「改善した」が16% (11教育委員会)、「同程度」が41% (28教育委員会)、「悪化した」が43% (29教育委員会)であり、依然として厳しい状況となっている²⁾。令和3年度に実施された、令和4年度採用選考の実施状況では、全体の競争率(採用倍率)は、3.7倍(平成3年度と同率で過去最低)で、前年度の3.8倍から減少している³⁾。校種別にみると小学校では2.5倍(過去最低)、中学校は4.7倍で前年度の4.4倍から増加したものの、高等学校では5.4倍で、前年度の6.6倍から減少した。文部科学省は、教師人材の確保を喫緊の課題として対策を進めている。

本研究ノートでは、教職課程履修学生を対象としたアンケート調査結果をもとに、教職キャリア意識について分析し、教育現場体験である教育実習がどのように教職キャリア意識に影響を及ぼしているか、今後の教育実習のあり方や課題を検討した。

2. 教職課程における教職キャリア形成

教職キャリア形成を行い、キャリア意識を高めるための教職課程科目として、本学では「教職入門」が設置されている。配当学年は1年生となっている。本科目は、教育の基礎的理解に関する科目群の一つであり、教職の意義及び教員の役割・職務内容(チーム学校運営への対応を含む。)を扱う。文部科学省の指針である教職課程コアカリキュラム(コアカリ)⁴⁾には、「現代社会における教職の重要性の高まりを背景に、教職の意義、教員の役割・資質能力・職務内容等について身に付け、教職への意欲を高め、さらに適性を判断し、進路選択に資する教職の在り方を理解する。」と全体目標が示されている。この全体目標を達成するため、教職の意義、教員の役割、教員の職務内容、チーム学校運営への対応の4つの項目が設定されている。

(1) 教職の意義の一般目標は、「我が国における今日の学校教育や教職の社会的意義を理解する。」であり、学生の到達目標は、①公教育の目的とその担い手である教員の存在意義を理解している、②進路選択に向け、他の職業との比較を通して、教職の職業的特徴を理解している、の2点となっている。

(2) 教員の役割の一般目標は「教育の動向を踏まえ、今日の教員に求められる役割や資質能力を理解する。」であり、学生の到達目標は、①教職観の

* システムデザイン工学部人間科学系列教授 Professor, Department of Humanities, Social and Health Sciences, School of System Design and Technology

変遷を踏まえ、今日の教員に求められる役割を理解している、②今日の教員に求められる基礎的な資質能力を理解している、の2点となっている。

(3) 教員の職務内容では、一般目標は「教員の職務内容の全体像や教員に課せられる服務上・身分上の義務を理解する。」であり、学生の到達目標は、①幼児、児童及び生徒への指導及び指導以外の校務を含めた教員の職務の全体像を理解している、②教員研修の意義及び制度上の位置付け並びに専門職として適切に職務を遂行するため生涯にわたって学び続けることの必要性を理解している、③教員に課せられる職務上・身分上の意義及び身分保障を理解している、となっている。

(4) チーム学校運営への対応では、一般目標は「学校の担う役割が拡大・多様化する中で、学校が内外の専門家等と連携・分担して対応する必要性について理解する。」であり、学生の到達目標は、①校内の教職員や多様な専門性を持つ人材と効果的に連携・分担し、チームとして組織的に諸課題に対応することの重要性を理解している、となっている。本学教職課程においてもコアカリに準拠し、教職キャリア形成を行っている。

3. 教職キャリア意識の調査

教職課程を履修している学生(57名)を対象に、教職キャリアの視点から、教職課程を履修した理由、教職に興味を感じた時期とその理由についてアンケート調査を行った。対象者のうち、教育実習を終了した学生(23名)には、教育実習体験が教職キャリア意識にどのように影響したかについても調査した。調査期間は2022年8月～9月である。その結果を以下に述べる。

3.1 教職課程を履修した理由

図1に教職課程を履修した理由について示す。「教員になりたかったから」が42.9%、進路の選択肢が広がるので「資格が欲しかったから」が32.1%、「教職に興味があったから」が10.7%、将来役に立つかもしれない「親や知人に勧められたから」が7.1%、「教えることが好きだから」が7.1%であった。

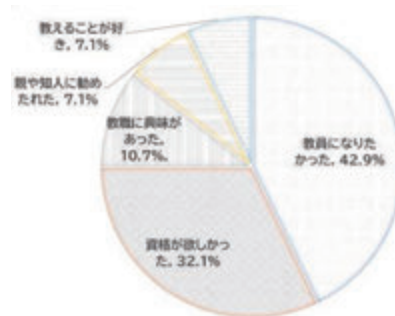


図1 教職課程を履修した理由

3.2 教職に興味を感じた時期とその理由

図2に教職に興味を感じた時期を示す。教職に興味を感じた時期は、小学校が8.9%、中学校が41.1%、高等学校が32.1%、大学が14.3%、社会人が1.8%、時期不明が1.8%であった。

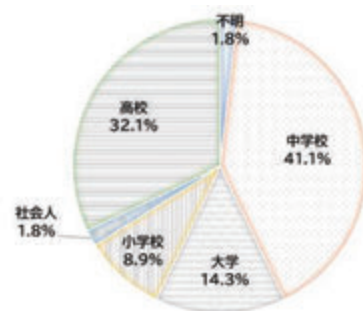


図2 教職に興味を感じた時期

図3に教職に興味を感じた理由を示す。小学校で教職に興味を感じた学生の理由内訳は、「家族や親戚に教員がいたから」が80.0%、「尊敬できる教員との出会いがあり自分もそうなりたと思ったから」が20.0%だった。中学校で教職に興味を感じた学生の理由内訳は、「尊敬できる教員との出会いがあり自分もそうなりたと思ったから」が65.2%、「友人等に勉強を教えて喜ばれた指導経験から」が26.1%、「教師に向いていると教員からのすすめがあったから」が4.3%、「仕事がイメージしやすく職業としての魅力を感じたから」が4.3%であった。高等学校で教職に興味を感じた学生の理由内訳は、「尊敬できる教員との出会いがあり自分もそうなりたと思ったから」が38.9%、「友人等に勉強を教えて喜ばれた指導経験から」が27.8%、「仕事がイメージしやすく職業としての魅力を感じたから」

が 22.2%、「わかりやすい授業を受け成績があがった経験から、教育への興味が湧いたから」が 11.1%であった。大学で教職に興味を感じた学生の理由内訳は、「大学のガイダンスを受けて教員免許取得ができるようになったから」が 37.5%、「塾講師アルバイトや友人等に勉強を教えて喜ばれた指導経験から」が 37.5%、「公務員としての安定性があり、職業としての魅力を感じたから」が 12.5%、「家族や親戚に教員がいたから」が 12.5%であった。

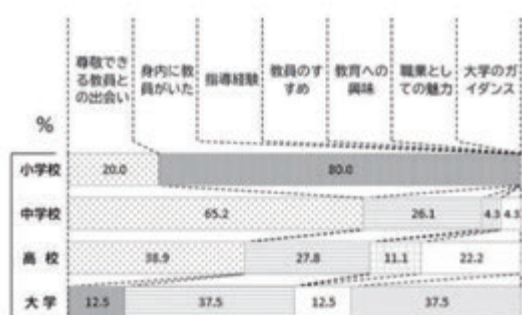


図 3 教職に興味を感じた理由

その他、社会人で科目等履修生として教職課程履修を始めた学生は、「社会人になり、教員として働いている家族からやりがいのある仕事だと言われ、コンピュータではなく人と関わる仕事をしたいと思ったから」、時期不明学生は、「なんとなく、いつのまにかであるが、自分のように勉強が苦手である生徒の目線で教えられると思ったから」が各 1 名ずつあった。

3.3 教育実習の教職キャリア意識への影響

図 4 に教育実習を体験した後での教職キャリア意識の変化を示す。

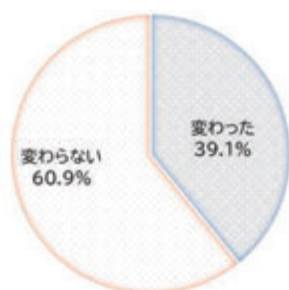


図 4 教職キャリア意識の変化

教育実習を体験し、教職キャリア意識は変わらな

い学生は 60.9%、変わった学生が 39.1%であった。

図 5 にどのように教職キャリア意識が変化したかを示す。



図 5 教育実習体験の教職キャリアへの影響

教職キャリア意識は変わらない学生では、教職に「就いてみたい」が 71.4%、「就きたくない」が 7.1%、「わからない」が 21.4%であった。就いてみたい学生の理由には、「実習先の先生方が仕事に生きがいを持って、とても楽しそうに働いている姿を見て、教員という職業への魅力が高まった。」「教員の仕事の大変さがよくわかった。それでも楽しさを伝える仕事、生徒の『わかった』という表情を見て、就いてみたいと思った。」「生徒たちといることが楽しく、明日もがんばろうという気持ちになれた。この仕事が好きだと思った。」という意見があった。就きたくない学生の理由には、「とても忙しく仕事の量が非常に多いから」があった。わからない学生の理由には、「想像以上の教員の仕事の大変さを経験し、自分にあっているのか不安になった。」「教員のプラス面、マイナス面をそれぞれ感じた。進路はまだ決まっていない。」があった。

一方、教職キャリア意識が変わった学生では、教職に「就いてみたい」が 55.6%、「就きたくない」が 22.2%、「わからない」が 22.2%であった。就きたくなかった学生の理由には、「実習前は就かなくてもよいと思っていたが、教育実習を通して楽しいと思えた。」「民間企業と迷っていたが、生徒が自分の授業をおもしろがって聞いてくれ、楽しいと思った。」「実習に行って、教科の奥深さ、面白さに触れて、教員になりたいと思った。」があった。就きたくなかった学生の理由には、「教えることの難しさに直面し、自信を失った。」「思ったような授業展開ができなかった。自分の指導力の低さを実感した。」があった。わからなくなった学生の理由には、「教職に就きたいとは思ってなかったが、教師不足の状況や労働環境を知り、やってもいいかもしれな

いと思った。」「今までは教職＝ブラックというイメージが強かったが、教育実習を通して子どもの成長に携わる仕事はすてきだと思った。大学院進学予定なので、しっかりと将来を考えたい。」の意見があった。

4. 教育実習の今後の課題

教職課程履修学生を対象としたアンケート調査結果から、教育実習を通して約4割の学生は教職キャリア意識が変わったこと、教育実習で成功体験ややりがい、楽しさといったプラス面を感じた学生は教職への意欲が高まり、失敗体験や自己効力感を失う体験から自信喪失した学生は、教職への意欲は低下した。「教職入門」から積み上げてきた教職キャリア形成を、「教育実習」という最終段階で、さらに積み上げていくにはどのようにしたらよいか。

教員の働き方改革の推進も重要であるが、『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について⁵⁾において中央教育審議会⁵⁾は、具体的方策の一つとして教育実習等の見直しについて言及している。全ての学生が一律に教職課程の終盤に教育実習を履修する形式ではなく、それぞれの学生の状況に応じた、柔軟な履修形式の提案である。具体的には、短期集中型の従来の履修スタイルに加え、通年で決まった曜日等に実施する教育実習、早い段階から「学校体験活動」を経験し、教育

実習の一部と代替する方法、異なる学年の学生が同時に参加する形を取ることで、上級生がメンターとしての役割を担うようにする等の工夫により、教職科目と学校現場の教育実践を相互に関連付けながら、学生が学びを深める取組方法を検討すべきとしている。教職課程履修学生を対象としたアンケート調査結果からも、このような機会の充実や、教育実習の時期・実施方法の見直しにより、学生の教職キャリア意識は高められるのではないかとと思われる。しかしながら、それに付随し、学校現場・大学の負担増も懸念される。今後の課題として、学校現場と大学の一層の連携・協働が求められる。

参考文献 等

- 1) 文部科学省 (2022) : 「教師不足」に関する実態調査 (令和4年1月31日公表)
- 2) 文部科学省 (2023) : (通知) 「教師不足」への対応等について (アンケート結果の共有と留意点)
- 3) 文部科学省 (2022) : 令和4年度 (令和3年度実施) 公立学校教員採用選考試験の実施状況のポイント (令和4年9月9日公表)
- 4) 文部科学省 教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会 (2017) : 「教職課程コアカリキュラム」
- 5) 中央教育審議会 (2022) : 「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～ (答申) (中教審第240号)